

埼玉県立 小児医療センターだより

● 埼玉県立小児医療センター

〒330-8777 埼玉県さいたま市中央区新都心1番地2

Tel▷048-601-2200 (代表) Fax▷048-601-2201 E-mail▷n581811@pref.saitama.lg.jp

URL▷<https://www.pref.saitama.lg.jp/scm-c/index.html>

真っ新だった病院の道にうっすらと轍がつき始めました
—いま小児医療センターで動き出していること—

副病院長 お ぐま えい じ
小 熊 栄 二



小児医療センターだより第11号をお届けします。はじめまして。わたくしは本年度より埼玉県立小児医療センターの副病院長のひとりとなりました小熊栄二と申します。前職が放射線科科長であり、直接のご紹介をいただく職場ではありませんでしたので、多くの皆様方には初めてのご挨拶となります。よろしくお願いたします。私もこれより病院の窓口のひとりとなります。お気づきの点など、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

当院が新都心に移転し1年半余が経過いたしました。院内の通路などに、うっすらと轍のような痕ができているのが見て取れるようになりました。人の歩む道が自然に定まり“体に馴染んできた”のだと感じております。発足した小児救命救急センターでは昨年度5,400名以上を受け入れ、救急車受け入れも約2,000台を数えました。78床からなる総合周産期母子医療センターでは年間入院数が428名に達しています。整備していただいた施設が有効に活用され役割を果たしているのは、ひとえに皆様方のご支援の賜物と感謝いたしております。

さて病院に課せられる使命は日々刻々と変化していきます。当初の構想にあった高度急性期医療の充実に加え、さらに新たな役割を担うべく、動き出している事についてご紹介したいと思います。当院は、本年度中の災害拠点病院の指定を目指しています。現在、県内には18ヶ所の災害拠点病院がありますが、さいたま新都心医療拠点にある当院も、災害発生時の傷病者への対応能力充実に寄与することを目的に、小児病院としては県内初、全国でも2番目の災害拠点病院の指定を目指しています。

また当院は全国15ヶ所の小児がん拠点病院のひとつとして指定を受けており、主要な小児がんでは全国で最も多くの症例数の診療を行っております。さらにいま、がんゲノム解析により正確性・有効性・安全性が高い診断・治療法を探索する、がんゲノム医療の実施体制の構築が全国的に進められていますが、当院も東京大学医学部附属病院を中核拠点病院としたがんゲノム医療連携病院の指定を受けることができました。国立成育医療研究センターとともに小児病院としては全国で2ヶ所のみであり、専門的な遺伝カウンセリングなどで小児病院の特徴が活かされてくるものと思われまます。

さらに、これまで胆道閉鎖症などで肝移植を必要とする患者さんは、他院に手術をお願いし、術後の外来フォローも手術施設で行われてきましたが、本年度より自治医科大学移植外科・水田耕一教授のご協力のもとに肝移植後の外来フォローを開始し、受診者の方の利便を図っています。

この他にも様々な取り組みの萌芽が現れております。地域との連携、皆様のお役に立つ診療を基本として、まずこの根幹の充実に努める姿勢にブレはありませんが、これら新たな役割に取り組んでいきたいと思っております。今後とも小児医療センターへのご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

埼玉県立小児医療センターだより 第11号 ご案内

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| ○ 副病院長 小熊栄二 挨拶 ……………p.1 | ○ 視能訓練士の紹介 ……………p.5 |
| ○ 神経科の紹介 ……………p.2 | ○ お知らせ |
| ○ 看護部 救急外来の紹介 ……………p.3 | ボランティア活動の紹介 ……………p.6 |
| ○ 眼科の紹介 ……………p.4 | 受診の案内・アクセス方法 ……………p.6 |

< 部門紹介 >

神 経 科

神経科 ^{はま} 浜 ^の 野 ^{しんいちろう} 晋一郎

【神経科の診療】

神経科は、神経筋疾患、運動障害、知的障害を有した子ども、ならびにそれらの障害のリスクをもっている子どもたちの診療を行っています。外来診療の窓口としては、乳幼児期の発達の問題を診療する“発達外来”と、てんかん、筋疾患などの慢性疾患の診療を行う“神経科外来”の二つに分かれております。この二つの窓口で診療している具体的な疾患名は、てんかん、急性脳炎、急性脳症、神経変性疾患、多発神経炎、重症筋無力症、筋疾患・先天性ミオパチー、発達障害等です。この中で、救急診療、集中治療を要するけいれん重積状態（てんかん重積状態）、急性脳炎・脳症に関しては、病院移転に伴い新設された救急診療科が受け入れ窓口となり、重症度に応じ集中治療科とともに確定診断、治療を実施しております。緊急の神経疾患のご紹介にあたっては、救急診療科がその窓口を担っており、亜急性期、慢性期と病態に応じ、集中治療科、神経科、総合診療科と密な連携を保持し、シームレスな対応しておりますので気兼ねなくご紹介いただくと存じます。他科との連携は、発達障害においても同様で、乳幼児期の障害診断は神経科医が“発達外来”で行わない、学童期以降は行動異常等を呈することもまれではないため精神科で対応しております。

【結節性硬化症の診療連携】

2018年からは、稀少疾患における他科との連携をより強化するために結節性硬化症（TSC）に関する診療連携組織として“TSCボード”を開設しました。年齢に応じ全身臓器の様々な病変が生じる結節性硬化症に対し、小児病院では各臓器別の診療体制のため、全身をくまなく診療することでは充分とは言えない状況がまれでないため、年齢と障害重症度に応じ、洩れなく診療できる体制を構築したいと考えて

おります。しかし、結節性硬化症は成人期移行が必要なため、小児病院のみの診療完結は不可能です。結節性硬化症の診療は院内連携とともに地域連携が不可欠であり、先生方のご意見、連携へのご参加をお待ちしております。

【小児神経疾患のトピックス】

最近のけいれん性疾患のトピックスとして、点頭てんかん（West症候群）の早期診断、早期治療介入の重要性が叫ばれております。点頭てんかんでは診療遅延が知的障害をもたらすためです。頭部を前屈する、両手をバンザイする等の軽微な発作のため、発作に気づかず家族が看過することもあり、発症後しばらくたって発達遅滞を主訴に受診することもまれではありません。ウエスト症候群患者家族会では、ホームページで発作の動画を掲載し注意喚起しており、一度ご高覧頂ければ幸いです（<http://ウエスト症候群.jp>）。

【神経科の継続的な試み】

神経疾患には完治が望めない病気が少なくありません。そのため、患児・家族の疾患理解と治療への積極的な参加が特に重要です。神経科では、保健発達部、看護部と協力し、患児・家族の疾患への理解を深め、治療への積極的参加につながる様に様々な試みをしております。その一例として看護部とともに、1996年より『てんかん教室』を開催しております。今回は2018年11月17日に開催予定で、内容は近日病院ホームページ（<https://www.pref.saitama.lg.jp/scm-c/shokai/naikashinryo/shinke/02-19-02-01.html>）に公開いたします。一般の方々にとっても、てんかんという疾患の理解に役立つ会にしたいと考えておりますので、お近くの方々へのご紹介をよろしくお願いいたします。

看護部 救急外来の紹介



師長 **岡野 則子**

救急外来は、内因性・外因性に関わらず、小児救急患者の救急搬送を365日24時間体制で受け入れています。平成29年度は約5,400人の患者を受け入れ、そのうち約2,000件が救急車による搬送でした。また、患者の緊急度に応じて速やかに医師の診察を受けることができるよう、全ての患者に対し看護師がトリアージを行っています。現在2名の小児救急看護認定看護師が在籍し、あらゆる状況において迅速で安全な看護が提供できるよう知識技術の向上に努めています。

救急受診する患者とご家族は、様々な育児支援に関するニーズをお持ちです。そこで、急病時のホームケアや不慮の事故再発防止などについて一緒に考え、安全・安心な環境で生活できるための支援を行っています。さらに、子どもの権利と尊厳を守り、ご家族の心に寄り添った最善の看護が提供できることをモットーに日々取り組んでいます。

—小児救急搬送入口—

救急車で来た患者さんの入口です。この入口の奥に、初察室があります。



—シミュレーション訓練—

知識・技術の向上を図ると共に、チームワークを高める機会になっています。



—さいたま市消防局「救急フェア」—

家庭看護力向上を目的に啓発活動の一環として医師と看護師が参加。傷の手当、熱性けいれん、脱水予防など、家庭看護のポイントを伝えています。昨年に続いて今年も救急フェアに参加する予定です。



—小児救急看護認定看護師による面談—

不慮の事故防止や育児に関するアドバイスなどを行います。また、必要に応じメディカルソーシャルワーカーが同席し、地域での継続的な支援の橋渡しをします。



< 部門紹介 >

眼科

眼科 かんべともか 神部 友香

○診療内容

広く小児眼科一般について診断治療を行っています。症例内訳は、半数弱を占める斜視、屈折異常を筆頭に、1/3が全身疾患に伴う眼症状、残りが他の眼科疾患となっています。

こどもの視力は視覚感受性期間である8歳くらいまでの間に発達します。視力の発達が妨げられている弱視に対しては、視能訓練士と協力して、眼鏡装用や健眼遮閉などの弱視治療を行っています。

視覚障害児への支援体制として、埼玉県立特別支援学校塙保己一学園（県立盲学校）教諭による個別面談を設けており、日常生活の過ごし方、人やものへの関わり方、学校・学級選択に必要な情報を提供しています。

特殊外来として小眼球・無眼球を対象とした義眼外来があります。

手術は主に斜視、内反症を行っています。霰粒腫切開など短時間の処置も全麻下で対応できるようになりました。

2017年1月総合周産期母子医療センター開設に伴い旧病院より増床した新生児病床では、日々未熟児網膜症のスクリーニングを行っています。レーザー治療を施行した未熟児網膜症は8眼でした。

今後とも症例のご紹介、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

○対象疾患

斜視、弱視、全身疾患に伴う眼科疾患、先天眼瞼下垂、眼瞼内反症、先天鼻涙管閉塞、眼瞼腫瘍、未熟児網膜症、先天眼振、白内障、角膜疾患、ぶどう膜疾患、網膜視神経疾患、緑内障など

○診療実績

2017年度の全麻下手術件数は下表のとおりです。

	症例数
外斜視	76
内斜視	27
他の斜視	12
眼瞼内反症	41
霰粒腫	14
結膜腫瘍	3
涙道閉塞	16
眼瞼デルモイド	1
眼球摘出術	1
白内障	10
網膜疾患に対する網膜光凝固術	12
計	213

視能訓練士の紹介



視能訓練士 こばやし じゅんこ 小林 順子

視能訓練士（常勤2名）は、眼科医の指示のもと、眼科一般検査、斜視や弱視の検査・訓練を行っています。その他に、視覚障害（ロービジョン）児に対する訓練や相談も担っています。

主な検査は、視力、視野など従来の眼科一般検査に加え、新病院では、最近話題になっているIT眼症の一つである調節障害の検査、網膜や角膜を撮影し画像解析できるOCT（光干渉断層計）や角膜形状解析装置、色覚検査の一つであるアノマロスコープなどが実施可能となりました。

旧病院から行っていました視能訓練では、斜視や弱視に対する両眼視機能検査と訓練を、視覚障害（ロービジョン）に対しては、ルーペや拡大鏡など視覚的補助具や遮光眼鏡の選定と訓練を引き続き行っています。

視能訓練士は眼科に所属していることが一般的ですが、当センターでは保健発達部に所属し、発達障害やコミュニケーションがうまく取れないようなお子さんにも対応しています。このようなお子さんの場合は、大勢のお子さんがある検査室では落ち着いて検査ができないことがあるため、落ち着いて検査ができる環境づくりに努めています。

眼科検査および視能訓練はすべて眼科医の指示のもとに行っています。

まずは眼科受診をお願いいたします。



視力検査の様子



検査室内の様子

お知らせ

ボランティア活動の紹介（その1）

小児医療センターでは、患者さんやご家族のために、たくさんのボランティアさんが活躍しています。今回は院内の「病院ボランティアの会」の活動をご紹介します。「病院ボランティアの会」は、外来でのご案内の他にも、それぞれの経験や得意なことを活かしてグループごとに活動をしています。

- 【外 来】 再来機や呼出端末機の使い方の説明、患者さんの荷物運搬の手伝い、院内の案内、プレイルームでの見守りなど
 - 【園 芸】 植栽の剪定や手入れ
 - 【手 芸】 病棟で使うミトンやシーツ、カバーなどの布製品の製作
 - 【イベント】 駐車場待合などでプレゼントする折り紙作品や、季節の飾りの製作
 - 【あそび】 絵本の読み聞かせ、工作、ハンドトリートメントの実施
- 他にも図書の修理、車いすの点検など、病院の療養環境を整えるお手伝いも行っています。いつも優しい、笑顔が素敵なボランティアさんたちです。ぜひ声をかけてみてください。



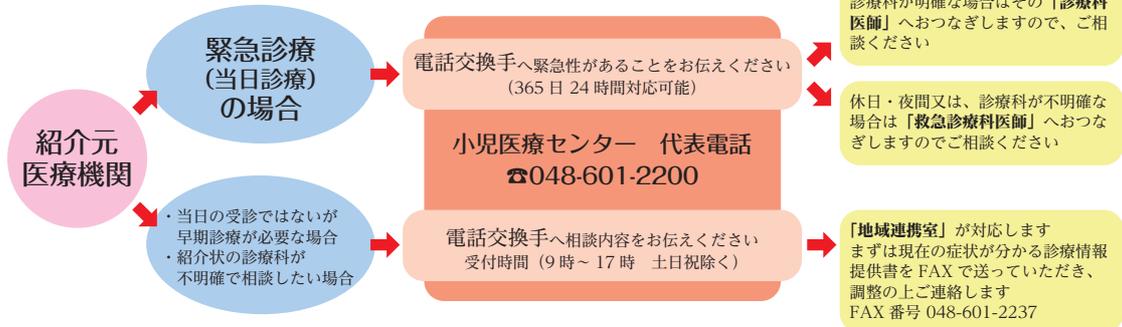
医療機関の皆様へ 受診のご案内



①患者ご家族からのご予約



②医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ



病院へのアクセス



■公共交通機関をご利用の方

- ・JR京浜東北線、宇都宮線、高崎線「さいたま新都心駅」から徒歩約5分
 - ・JR埼京線「北与野駅」から徒歩約6分
- ※歩行者用デッキを点線に沿ってお進みください。

■お車をご利用の方

- ・駐車場は有料になります。
 - ・機械式駐車場には車両のサイズの制限があります。
- ※ご利用の時間帯によっては、車両が集中し、入庫まで大変お時間がかかることが予想されます。
- できるだけ、公共交通機関のご利用をお願いいたします。